
いる筈がない

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いる筈がない

【Nコード】
N1690L

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
夏の砂浜。朝に出会った年上のお姉さん達にもう出会える筈がないと思っていると。五分企画の作品です。

第一章

いる筈がない

二人の少年が砂浜を歩いていた。朝の砂浜はとても爽やかで気持ちがいい。そこを二人で歩いていた。

そしてだ。歩きながらこんな話をしていた。白いその砂浜の上を歩いて同じく白く奇麗な波を見ながらだ。

「今この時間に泳いでる人なんていないだろ」
「いないか？」

「ここサーファーいないしさ。いないって」

片方の黒髪の少年が言う。

「そんな人。朝になんかな」

「いないか」

「泳ぐのならあれだよ。朝御飯が終わってからだよ」
それからだというのだ。

「それから泳ぐだろ。ちゃんと身体が動くようになってからな」

「そういうものかな」

「そういうものだよ。それじゃあな」

「うん、それじゃあ」

「俺達も一旦旅館に帰ろうぜ」

こう片方の茶髪の少年に話した。

「それで御飯食べてからな」

「泳ぐか」

「そうしようぜ。しかし男二人つてのもな」

「味気ないよね」

「折角誘った二人は来ない」

実は海に誘った女の子が二人いたのだ。しかしその二人には揃ってドタキャンされてしまった。彼等にとっては痛恨の出来事であった。

「どうなんだろうな」

「言っても仕方ないよ。まあ帰ってさ」

「食べて泳いで忘れるか」

「そうしよう」

こう話して誰もいない朝の砂浜を後にしようとする。しかしここで。

海の中から人魚が出て来た。最初はそう見えた。

「えっ!？」

「まさか!？」

しかしそれは違っていた。人魚ではなく普通の人間だった。ただし外見がかなりいい。

一人は黒いショートヘアでアーモンド型の目をしている。口がやや広く大きいのが奇麗で知的な顔をしている。白いビキニから胸が弾けそうである。

もう一人は茶色のロングヘアで奥二重のかなりはつきりとした顔をしている。胸はもう一人より大きくはないがスタイルは全体的にいい。こちらのピンクのビキニも眩しい。どちらも大学生の様で二人よりずっと年上である。

「いたって」

「人魚が」

「あら、言ってくれるわね」

「人魚だなんて」

その二人の大人の女性は彼等の驚いた言葉を受けてくすりと笑って返してきた。

「生憎だけれど違うわよ」

「ただの女子大生よ」

「そうなんですか」

「朝から泳いでたんですね」

「ええ、そうなのよ」

「それが気持ちいいからね」

だからだというのであった。

「だからだけれど」

「勿論これから泳ぐわよ」

「そうなんですか」

「朝御飯食べてからも」

「そうだけれど。ねえ君達」

「今二人だけ？」

向こうからにこりと笑って声をかけてきたのであった。

「よかつたらね。私達朝御飯の後ですぐにここに戻るから」

「一緒にどうかしら」

「えっ、一緒につて」

「泳ぐつてことですか!？」

今聞いた言葉を思わず問い返した二人であった。二人にとってはまさに寝耳に水の話であった。どれだけ寝惚けていても完全に起きしてしまうような言葉であった。

少なくともこれは二人にとってはあまりにも刺激的であった。本来に少しばかり残っていた寝惚けが完全に吹き飛んでしまった。それはコーヒーを飲んだ時よりも効果があつた。もう目が覚めて仕方がなかった。そして心臓の鼓動が高まっていくことさえ感じられた。もうこうなつてはどうしようもない、自分で自分が抑えられなくなる、何か夢を見ているような気持ちになつてそのうえでさらに期待までしてだ。それでどうしようもないまでに高まるその気持ちを自分達でもそれぞれ感じてである。たまらなくなつてきていた。

「俺達と」

「つまりは」

「じゃあ誰が他にいるの？」

「君達だけよ」

二人の人魚達はまた彼に言ってきた。それはまるで彼等の心の中を覗いているかのようなのである。もっとも年が上の彼女達にとってみればだ。こうしたことはもうわかつていてそれでやってきているの

かも知れない。少なくともそうなつていてもおかしくはなかった。だとすれば確信犯であるがどちらにしても彼等がこの年上の麗しい人魚姫達に籠絡されようとしていることは明らかであつた。これは二人でなくともそこに誰かがいれればすぐにわかるような有様であつた。彼等にはもうどうしようもなくなくなつてしまつていた。心の高まりはそこまで高まつていたからである。

「だからね。いいわね」

「一緒に泳ぎましょう」

「嘘じゃないよな」

「そうだよな」

二人は顔を見合わせて言い合う。お互いに頬をつねりそうになるがそれは止めた。幾ら何でもあまりにもベタな展開だと思つたからである。しかしそう思つたことは事実である。嘘だと思えなかつた。完全に目が覚めてしまつているがそれでもである。そう思わざるを得ないような有様である。なお二人は今鏡を見ていないので彼等は気付いていなかったがその顔は真っ赤になつてしまつてゐる。もう興奮してしまつていてどうにもならなくなつていたのである。心臓は先程よりもさらに高まりそれがもうどうしようもないままになつてしまつてゐる。それが可能ならば心臓は胸から飛び出てしまつていたであらう。二人はそこまで高まつていたのである。

「こんな奇麗なお姉さん達と一緒になんてな」

「狐に化かされたみたいだよな」

「あら、奇麗だなんて」

「それに海に狐は出ないわよ。出るのはね」

「出るのは？」

「何ですか？」

こう二人が問うたであつた。返答は。

「人魚よ」

「海から出るのはね」

「人魚姫………」

「しかも泡になって消えることはない」

二人はここでまた話が信じられなくなった。やはり有り得ない展開にしか思えないからだ。しかしその人魚姫達というところだった。まるで二人のことが完全にわかつているように。悪戯っぽく笑ってこう言ってきたのである。

「はい、お話はこれで終わりよ」

「御飯を食べたらすぐにここに来てね」

二人に対して有無を言わせない口調だった。

「それで話は終わり」

「いいわね」

「は、はい」

「わかりました」

こうしてお姉さん達の言葉に素直に従う二人だった。そうしてその日は昼だけでなく朝まで楽しい時間を過ごしかもそれがはじまりだった。全く以て有り得ない話だったがそれは夢ではなかった。現実であった。

いる筈がない

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1690/>

いる筈がない

2010年10月8日15時02分発行